The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グラスゴーの都市再生プロジェクト : 文化都市の確立とその後:「未来の家」を例に
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 2005, 47, p. 79-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53060
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グラスゴーの都市再生プロジェクト
── 文化都市の確立とその後：「未来の家」を例に ──

吉　村　典　子
宮城学院女子大学

キーワード
都市再生　グラスゴー　住宅供給　「未来の家」
urban regeneration, Glasgow, housing,
'Homes for the Future'

はじめに
1．グラスゴー再生の歩み
　1－1．歴史遺産の再生と「文化」移植
　1－2．文化創出都市へ
2．文化都市以降の再生プロジェクト
　2－1．「英国建築デザイン都市」のプロジェクト
　2－2．「未来の家」プロジェクトとその成果
おわりに

はじめに

産業革命後の19世紀のイギリスでは，鉄鋼業・織物業に代表される製造業が発展し，物資の輸送に水上の交通を利用できる海や川に面する街は大いに繁栄した。マンチェスター，リヴァプール，バーミンガム，ニューカースル，グラスゴー，ベルファースト等はその典型である。しかしこれらの都市は，戦後の大不況，工業社会から情報社会への変化にともない空洞化していった。その後，1980年代のサッチャー政権のもとで，民間を積極的に参入させた再生計画が盛んに進められていく。その政策は多くの問題を孕んでいたが[1]，それを足がかりとして，あるいは，その批判から地方自治体や民間団体等が様々なかたちの都市再生の手法を展開していくことになる。その過程において，かつての工業都市は，工業とその衰退にともなう負のイメージを払拭すべく「文化都市」へのイメージ転換を積極的に行ってきた[2]。この中で，いまや常套手段でもある文化や歴史遺産を活かしたまちづくりに取り組んでいったのであるが，工業都市として発展し，その弊害をいち早くうけたイギリスのポスト工業都市では，そうした手法による再生の時代を経て，今では新たに文化を創出しながら，都市を育成していく手法が見られる。その手法と成果をみるのが本稿のねらいである。

これまで筆者は，前掲の都市を中心にイギリスにおけるポスト工業都市の再生事情を調査してきた。その中でグラスゴーは，はやい時期から「再生」に着手し，多くの実績と展開をみせ

ている。そしてそれを他のポスト工業都市が手本としているケースもみられる。本稿では，このグラスゴーを例に，上述の経過と展開をおう。それにおいて，本稿ではまず，再生への取り組みがみられる1970年代末から今日に至るまでの変遷をたどる。そこで明らかにされるのが，1990年代前半までの手法と後半から今日にいたるまでの手法の違いである。前述の文化創出都市への手法がみられるのは，1990年代後半からである。その具体例として，本稿の後半では1999年の「英国建築デザイン都市」祭典前後の動きを取り上げる。そして，「英国建築デザイン都市」のプロジェクトの事例として「未来の家」をあげ，詳細をみていく。「未来の家」は，実際の集合住宅であるとともに，「英国建築デザイン都市」年の住宅博覧会として公開することも目的として計画されたものである。事例研究では，このプロジェクトの過程をおうとともに，住民へのアンケート調査を行うことにした。これらを例に，近年の都市再生の動きを明らかにするとともに，アンケート等で明らかにされる実態と問題点をとおして，グラスゴーのみならず，ひろく再生プロジェクトというものの意義を探ることにしたい。

1．グラスゴー再生の歩み

グラスゴーは，大西洋に注ぐクライド川に面したスコットランドの大都市である。古くから国内外との交易があり，特に19世紀を中心としたヴィクトリア時代には，造船業，機械工業が著しく発展し，国際商工業都市として繁栄を極めた。しかし，ヴィクトリア末期にはかげりをみせ，戦後にいたっては，経済不況，それに伴う失業，スラム化，貧困，暴動など，負のイメージがつよまっていった。

こうしたなかで1970年代末になると，中央政府による地域経済振興が各地でみられるようになる。スコットランドでは，1982年からのサッチャー政権およびスコットランド開発庁の働きかけによって多くの外資系の電機・電子，IT 企業が誘致され，「シリコン・グレン(Silicon Glen)」と呼ばれるようにもなった。これは，地域経済の振興とともに，後の様々な文化プロジェクトの企業スポンサーシップの構築につながるものとなった。スコットランド開発庁はその後組織改変され，今では，地域企業局により分権的な運営がすすめられている。グラスゴーでは，地元企業，大学，市議会などによる共同経済戦略がはかられ，中央政府からのトップダウン方式から，自力的発展へと変化をみせるようになった。

こうした経済振興とともに，産業構造の変化に対応した脱工業都市への動きが，1970年代後半ミッチェル・ケリー市長の代から始まった。81年に市の観光課ができ，美しいハイランド地方への玄関口としての，そして，ヴィクトリア時代の文化遺産を再生させて文化都市としての色彩を強めようとした。この頃から今日にいたるまで，継続的に行われている再生の手法としてあげられるのが，スローガンを用いて市民へ，そして，対外的にもメッセージをおくっ

ている点，文化イヴェントの継続的誘致と開催を起爆剤として物理的再生を進めている点である。この2点を中心に，今日までの経過と展開を以下でみていくことにする。

1－1．歴史遺産の再生と「文化」移植（1980年代～1990年代前半）

1983年，市内に美術博物館「バレル・コレクション」が開館した。これは，造船業等で莫大な財をなしたウィリアム・バレルが収集した，9,000点以上の古代から近代にいたる美術工芸品（1944年市に寄贈）を所蔵・展示するものである。この開館と同じ年，市が積極的に取り組んだ改革が，市民への意識改革で，市中のいたるところに“Glasgow's Miles Better（グラスゴーははるかに良くなった）[3]”の文字が登場するようになる。こうしたスローガンを掲げたキャンペーンは，長期にわたる地元経済の不振，産業の衰退による市民の喪失感，虚脱感を改善していこうというものであり，都市の経済的，物理的再生より意識改革が先決だという理念からはじまったものである。スローガンは，横断幕，リーフレット，記念グッズ等に統一的な視覚デザインを用いて伝えられることによって，市民の意識の中に刻みこまれていった。もちろん，これは対外的にも負のイメージが強かったグラスゴーが「はるかに良くなった」ことを示すメッセージでもある。

一方，物理的再生の起爆剤として積極的に誘致したのが，国およびＥＵレヴェルの文化イヴェントである。以下は，グラスゴーで開催された主なイヴェントの一覧である（〈　〉は開催年）。

① Glasgow Garden Festival〈1988〉
② European City of Culture〈1990〉
③ Festival of Visual Arts〈1996〉
④ U.K. City of Architecture and Design〈1999〉
⑤ European Capital of Sports〈2003〉

平均して3年から4年のスパンで実施している。後述するように②の“European City of Culture（欧州文化都市）”が文化都市への大きなステップとなり，数多くの成果をもたらすことになったが，以降，それを失速させることなく，むしろ加速させることになったのは，途切れることなくイヴェントを開催していったことにもよるであろう。イヴェント開催にむけての助成金や企業のスポンサーシップの獲得，都市整備，イヴェント会場や文化施設等の建設が，都市再生に拍車をかけ，市民の利益にむすびつけながら，「変わってきている」という印象を内外に与えている。

こうした文化イヴェントの中で90年の「欧州文化都市」としての地位は，市民のみならず，再生をめざす地方都市への大きな刺激となったものである。これはＥＵによる祭典であり，かつてのギリシア文化大臣メリナ・メルグーリによる「真のヨーロッパ統合には，お互いのアイ

デンティティとも言うべき，文化の相互理解が不可欠である。」という提唱から1985年発足した制度で，ＥＵ加盟国の文化閣僚会議で加盟国の中から一都市を選び「欧州文化都市」と定め，一年間を通して様々な芸術文化に関する行事を開催するものである。アテネやパリなど，歴史都市が続く中でのグラスゴーの決定は，市民に自信と誇りを蘇らせ，対外的にも文化都市としてのイメージを形成することにも有効に働いた。またこれは，地方と中央という従来の国内での関係性の枠をこえたＥＵレヴェルでの理解と支援の獲得例としてあげることができる。

「欧州文化都市」年前後には文化インフラの整備がすすみ，祭典の年には，3,400をこえるイヴェントが開催された。市の調査によると，文化施設の使用者が40%あがり，市民の参加も31%あがった。国内外からの訪問者のうち74%が再度訪れたい都市として位置づけているということである[4]。しかし，遺産の再生に加えて，この時までに整備された，あるいは，計画が決定した文化インフラは，旧埠頭地のスコットランド国際展示・会議場（SECC, 1985年），ロイヤル・コンサート・ホール（1990年）等である。そこでの当初の展示や会議，および，公演の殆どは，国際的に評価をうけている，あるいは，認識されている海外からのもので，それは「文化」の移植でしかない。もちろん，集客とそれにともなう滞在等でまちへの経済効果はある。しかし，それを開催でき，受容できることが文化都市ではない。そこで留まっていたとしたら，今日にいたる発展はなかったであろう。変化がみられるようになるのは，1990年代中葉からである。

１－２　文化創出都市へ（1990年代後半）

前掲の文化イヴェントの内容をみていくと，90年代後半になると，広く文化にかかわるイヴェントから，グラスゴー固有の文化を打ち出していく方向，さらには，その都市ならではの魅力と文化を創出していこうとする方向がみられるようになる。グラスゴーは，チャールズ・レニー・マッキントッシュをはじめとする「グラスゴー派」のデザイナーたちが19世紀末から活動の拠点としていたことで知られているが，その他にも，繁栄を極めたヴィクトリア時代の産業資本家たちのアート・コレクションや急速な都市化とともに建設されたヴィクトリア時代の建築を有している。これまでの文化イヴェントでも，これらを文化資源として，再生，公開などがなされてきたが，特に前掲リスト④の“U.K. City of Architecture and Design（英国建築デザイン都市，1999年）”では，それらと対話し，さらには新たな建築デザインの遺産を構築していこうとする方向がみられる。

「建築デザイン都市」に決定後は，1999年の開催年にむけて，96年からプログラムが組まれた。その一つが前掲のリスト④の“Festival of Visual Arts（ヴィジュアル・アート・フェスティヴァル）”の開催である。この年には，絵画，彫刻，写真，建築，デザイン，フィルム，ヴィデオ等あらゆる視覚芸術に関する国際フェスティヴァルを開催した。この祭典は，99年

の「建築デザイン都市」のプレイヴェントとしての要素をもつとともに，1990年の「欧州文化都市」と1999年の「建築デザイン都市」の間の開催により，イヴェントを通して再生されつつあった都市の動きを持続させることにつながっていくものであった。実際，観光客のグラスゴーでの消費は，「欧州文化都市」以降確実に増加しており，観光産業にも拍車をかけるものであった。そのピークを示した1999年は，「英国建築デザイン都市」の年であり，この時は，市中で300を超えるイヴェントが開催され，多くの地元企業もスポンサーとして支援していった。「未来の家」はこの祭典の主要プロジェクトの一つであった。

これらの1990年代後半のイヴェントからは，単なる再生のためや，歴史遺産への認識を高めるだけでなく，また起爆剤としての祭事的なイヴェントとしてではなく，次世代にむけて歴史をつなげ，その延長上にあらたな提案をしていく方向がみられる。それはスローガンをみるとより明確になる。1990年代中葉からは“Glasgow's Miles Better”は徐々に姿を消し，“Glasgow's Alive（グラスゴーは活気づいている）”から“Glasgow's For It（グラスゴーは先端をいく）[5]”へ，さらに近年では“Glasgow: Scotland with Style（グラスゴー：おしゃれなスコットランド）”の文字が市中を賑わしてきている。再生を意識させるスローガンから，創造的都市を想起させるスローガンに変わってきていることがわかる。スコットランドでは，もう一つの大都市エディンバラと何かにつけ比較されるグラスゴーであるが，かつて「文化のエディンバラ，スラムのグラスゴー」と言われていた状態から，「グラスゴーははるかに良くなった」ことを伝え，エディンバラの歴史的景観や伝統的なイメージに対して，現代性や先進性を市の特性として打ち出していこうとする方向を，近年のスローガンに読み取ることができる。実際，グラスゴーにおいては，「文化都市」，「商業都市」としての実績をつみ，今やショッピングやファッション関係のこととなると，スコットランド住民は，エディンバラより，グラスゴーに集まるようになっている。エディンバラ住民でさえも，「買い物やナイトライフはグラスゴー」という声が多いのである。

以上，スローガンによる意識改革や文化イヴェント誘致にみるグラスゴーの再生の歩みをみてきたが，本章の１－１に示したような1990年代初頭までの動きは今や目新しいものではない。「再生」以降の展開が注目されている昨今においては，１－２に関わる文化都市確立以降の展開の詳細をおうべきであろう。以下では，その時代に焦点をあて，1999年に開催された「英国建築デザイン都市」を通しての手法とその展開をみていくことにしたい。

２．文化都市以降の再生プロジェクト

２－１　「英国建築デザイン都市」のプロジェクト

「英国建築デザイン都市」制度は，アーツ・カウンシルが提案したプロジェクト「アート

2000」の一環で，地域の芸術文化の振興を意図し，1999年にイギリスの一都市を任命することにしたものである。1994年に審査が行われ，立候補した18の都市の中からグラスゴーが選ばれ，400,000ポンドの助成金を受けることとなった。そして開催年と開催地名から「グラスゴー99」が通称となった。

この年の祭典のハブとなった施設は「ライトハウス」で，これは1895年にマッキントッシュがヘラルド新聞の社屋として設計し，1980年以来廃墟となっていたところを，スコットランドの建築デザインのセンターとして再生させたものである。その他の文化インフラの整備もこの祭典の前後にかなり進められたのであるが，この時，特に力を入れたのが公共領域の整備である。特に近年よく耳にするようになったパブルック・レルムは，都市環境の問題においては，公共領域を改善していく計画においてよく使われる言葉であるが，その公共とは，公園や文化・娯楽施設等，特定の目的で人々が集う場というよりは，通勤や買い物などで行き来する通りや繁華街，バス停や地下鉄の入口等，人々が日常的に利用するような所謂「生活景」を豊かにしようというものである。グラスゴーでは，街の一番の繁華街のあるブキャナン通りとソッキーホール通りのL字形のつながりをつよめ，「ヨーロッパで一番美しい通り」をめざし四段階にわけて，外灯などのストリート・ファニチァ，歩行者天国の舗石の改善，活気ある街並みを完成させるための小売業者の誘致が進められた。最近では，オープン・カフェやバー等も増え，通りは，「通る」場だけではなく，「過ごす」場となってきている。これは後述する「職住近接」のライフ・スタイルを確立させる上では，重要な要素となっている。

また経済においては，文化イヴェント開催には経済効果もねらわれているわけであり，実際，その成果が得られてきたのであるが，「グラスゴー99」では，そうした祭事的経済効果ではなく，地元経済を育成していくプロジェクト「グラスゴー・コレクション[6]」が組まれた。「よいデザインは確かなビジネスとなる」ということを信条にして，建築家，デザイナー，市民，製造業者らが結びつき，建築やデザインの質の向上とそれを通しての経済効果や雇用創出をねらった。グラスゴーを拠点とするデザイナー育成とともに，優秀者には，国際レヴェルのデザイナーの作品と並べて展示する機会をつくり，自負心をも育てていった。すべてはグラスゴーでの革新的デザインの創出および製品化を支援するもので，かつて「グラスゴー派」の時代がそうであったように，デザインの街としての名を確実にさせるというのがもう一つのねらいである。

さらに，市民への啓蒙や参加型の企画を積極的に立ち上げ，「建築デザイン都市」のプログラムの一部を学校のカリキュラムと融合させ教育的効果をねらったり，パートナーシップ基金を組み，市民に対して「建築デザイン都市」の主旨にふさわしい企画には，実施への道と助成金等による支援を提供したりした。こうしたコミュニティ・プロジェクトには，約5,000人が参画した。この時の成果は，街の風景の中に刻まれているが，地域団体の営みとしても，小冊子

に記録され出版されている[7]。

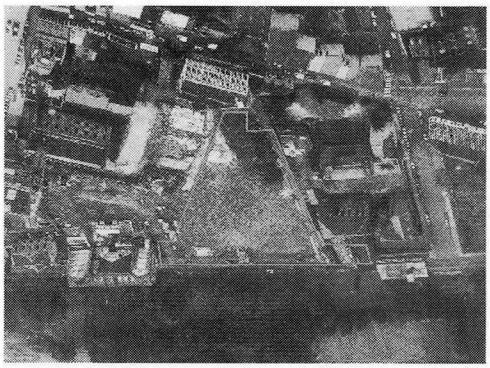
このように，歴史遺産を提示していくとともに地域の文化を創出していく方向性をつくったのが「グラスゴー99」のプロジェクトといえる。では次に，そのプロジェクトの一つをあげて，詳細をみていくことにしたい。

2－2「未来の家」プロジェクトとその成果

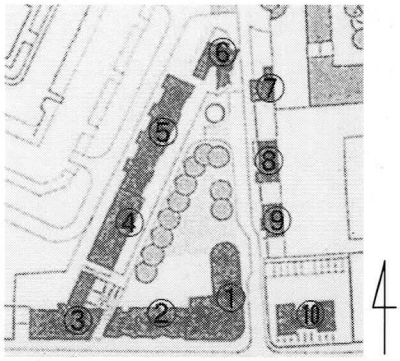
2－2－1　ねらい

「グラスゴー99」のプロジェクトの中で，最も重要なものの一つとされているのが“Homes for the Future（未来の家）”である。このプロジェクトは，「未来」という言葉が暗示しているように，人々の暮らしの提案をしていこうとするもので，99年の主要博覧会として，そして実際に暮らすための住宅として計画された。場所は，クライド川沿いの緑豊かな公園グラスゴー・グリーンに隣接し，さらに市の繁華街へ数分という利便性の高い地でありながら，所謂「インナー・シティ」のイメージから開発が遅れていたところ（1.5acre＝6070.35㎡の三角形の空地，図版1）である。グラスゴーのように，産業革命後の工業化の中で急速に発展，拡大した工業都市は，工業化による生活様式の変化，および，人口増加に対処するために，様々な住宅様式を確立させてきた。とりわけ，19世紀後半に進んだ郊外住宅建設は，「職住分離」のスタイルを確立させ，また，戦後の住宅難においては，高層集合住宅化を進めた。これらの住宅様式は，1970年代から深刻化する都市の空洞化問題の要因の一つとなるものでもあった。こうした昨今の都市問題を解決すべく住政策においては，都市生活の利点を強調する「職住近接」のスタイルが，グラスゴーのみならず，日本も含めた世界の大都市で謳われてきている。しかし，19世紀に確立した「職住分離」の価値観は，他の先進国と比べイギリスは極めて根強い。こうした住環境をめぐる暮らしの価値観の再定義を行い，都市生活の新しいスタイルを提案するというのが「未来の家」のねらいである。

このプロジェクトには，D. スジェック[8]をディレクターに迎え，グラスゴー市，スコットランドの住宅供給公社，そしてディベロッパーや国内外の建築家たちがチームを組んで取り組んだ。その意味で官民協働の，そして，計画と市場が結びついたものといえよう。マスター・プランは，指名コンペでグラスゴーを拠点とするページ＆パークが選出され，そのプランの中で，各建物のコンペを行い10組のチームが10棟の集合住宅の建設に挑むことになった（図2，表1）。マスター・プランは，幅広い層に対応できるよう，様々な間取り（単身用住まいから，最上階の高級アパートまで）と価格設定（60,000～150,000ポンド）で，100戸の住まいをつくるというものである。基本コンセプトは，将来的な家族構成や生活パターンの変化にも対応しうるフレキシビリティをとおして多様性を示すというものである。もちろんそこには，環境問題やサステナビリティが強く意識されていることは言うまでもない。そして，前述のように



図版１：「未来の家」建設地（敷地面積6070.35㎡）



図版２：住宅配置図

表１　プロジェクトチームと住宅のタイプ

図版２上の配置	プロジェクト・チーム Dev/Developer, Arc/Architect, Des/ Designer	住宅のタイプ、間取り*等
①	Dev/ The Burrell Company Arc/ Ushida Findlay Partnership Des/ Ron Arad	共同住宅 6 階建　全 13 戸 1 階：商業スペース 2~5 階：各階 3 戸(ベッドルーム 1~3) 6 階：1 戸(ベッドルーム 2)
②	Dev/ Dicke Arc/ Rick Mather Des/ James Irvine	共同住宅 7 階建　全 24 戸 1~5 階：各階 4 戸(ベッドルーム 2) 6~7 階：メゾネット 4 戸（ベッドルーム 2~3)
③	Dev/ Dicke Arc/ Elder & Cannon Des/ Adrian Winszniewski	共同住宅 7 階建　全 19 戸 1 階：商業スペース+車庫 2~5 階：各階 4 戸(ベッドルーム 1~3) 6~7 階：メゾネット 3 戸（ベッドルーム 2~3)
④	Dev/ Dicke Arc/ Elder & Cannon Dec/ Elder & Cannon, Iwd	連続住宅 4 階建　全 7 戸 1 階：車庫 2~4 階：住居(ベッドルーム 2~3)
⑤	Dev/ The Burrell Company Arc/ Mckeown Alexander Des/ Mckeown Alexander Kostantin Gric	連続住宅 3 階建ⓐ+2 階建ⓑ　全 8 戸 ⓐ1 階：車庫(ⓐⓑ用) 2~3 階：住居 4 戸(ベッドルーム 3~4) ⓑ1~2 階：住居 4 戸(ベッドルーム 1~2)
⑥	Dev/ The Burrell Company Arc/ Mckeown Alexander Des/ One Foot Taller	共同住宅 4 階建　全 7 戸 1 階：1 戸(ベッドルーム 1) 2~4 階：各 2 戸（ベッドルーム 1)
⑦	Dev/Logan Construction Management Arc/ RMJM	共同住宅 3 階建　全 2 戸 1 階：1 戸(ベッドルーム 2)+専用庭園 2~3 階：メゾネット 1 戸(ベッドルーム 3)+専用屋上庭園
⑧	Dev/ Logan Construction Management Arc/ RMJM Des/ Tom Dixon	共同住宅 4 階建ⓐ +5 階建ⓑ　全 6 戸 ⓐ1~4 階：各階 1 戸(ベッドルーム 2) +共同屋上庭園 ⓑ1~2 階：メゾネット 1 戸+専用屋上庭園 3~5 階：メゾネット 1 戸+専用屋上庭園
⑨	Dev/ Mactaggart & Mickel Ltd. Arc/ Wren Rutherford ASL Des/ Anne McKevitt	共同住宅 4 階建　全 2 戸 1 階：1 戸(ベッドルーム 1)+専用庭園 2~4 階：メゾネット 1 戸(ベッドルーム 3)+専用庭園
⑩	Dev/ The New Housing Association Arc/ Ian Ritchie	共同住宅 6 階建　全 12 戸 1~6 階：各階 2 戸(ベッドルーム 2)

* 間取りは、リヴィングルーム 1、キッチン 1、バスルーム 1 は全戸共通で、表にはそれ以外の部屋数を載せた。
(イギリスでは間取りはベッドルーム数で示されるので、それに準じた)

イギリスにおいて極めて根強い「職住分離」のスタイルから「職住近接」の，郊外ではなく都市型の，19世紀とは異なる新たな住まいを提案するというものである。つまり，サバーバニティではなくアーバニティである。

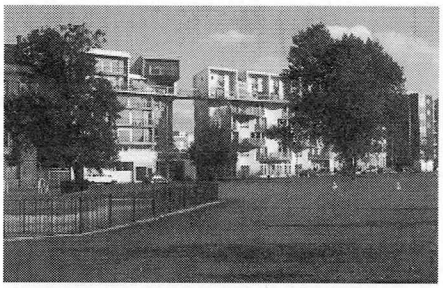
それぞれの住まいの計画には，少ないものでも2つの，多いものでは50以上の企業スポンサーがつき具体化され，分譲および賃貸というかたちで市場にだされた。「グラスゴー99」では，住宅博覧会として，いくつかの住戸が著名デザイナーたち（表1）によってしつらえられ，公開された。

2－2－2　実　　践

以上のような計画のもと，実際に完成した住宅はどのようなものか。ここでは，このプロジェクトのねらいと関わると部分，とりわけ，都市住宅およびアーバニティが模索される中でどのような提案がなされているのか，という点を中心にみていくことにしたい。

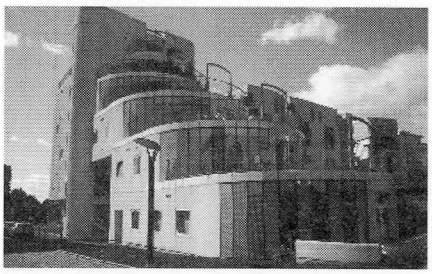
敷地内には，グラスゴー・グリーンに面して，共同住宅（図版3）が，三角形のインナー・コートを囲むように，連続住宅（図版4）や共同住宅（図版5）が建てられている。建物の1階部分およびインナー・コートの一部が駐車場となっている。すべて2階から7階建の低層から中層の集合住宅である。これは，周辺のスカイラインを意識したものであるが，70年代から顕著になる高層都市型住宅への批判に対する一つの提案といえる。しかしそれは同時に，1戸面積がさらに限られていくことを意味する。それに対して，このプロジェクトの中で謳われ，実践されていることの一つが「アウトドア・ルーム[9]」である。例えば，図版6の共同住宅には，各階通路の左右に1戸ずつ住居があり（図版7），玄関を入ると南北に開口部をもたせた専用スペースがある（図版8）。これが「アウトドア・ルーム」である。多目的スペースであり，ここからは，室内の各スペースに直接出入りできるドアがいくつかつけられている。キッチンにつながるドアが一番広くとられ，家事をしながら子供等が遊ぶ様子も見ることができるであろうし，もう一つのリヴィング／ダイニング・ルームともなりうるであろう。

この他の，この地固有の魅力的なスペースは，敷地の南側にひろがるグラスゴー・グリーンであろう。それを風景として住まいから享受できる南側の住宅には，すべてバルゴニーが設置され，これもまた専用の「アウトドア・ルーム」と言えるであろう。また，正面がインナー・コートに面する住宅は，その緑と光を多く取り込む大きな窓（図版9）や広いルーフ・バルコニー，専用のインナー・コートや屋上庭園などが設けられている。いずれも，室内の延長上に外界とつながるもう一つのスペースである。そして，それらは住人同士が共有できたり，専用のものでも閉鎖的ではなく，近隣の人々と直接コミニュニケーションができるぐらい開放的である。つまり，こうした「アウトドア・ルーム」は，自然だけでなく人も含めた外界とつながるものであり，スペースが限られているからこそ効果的に機能し，単調になりがちな都市型住宅に変

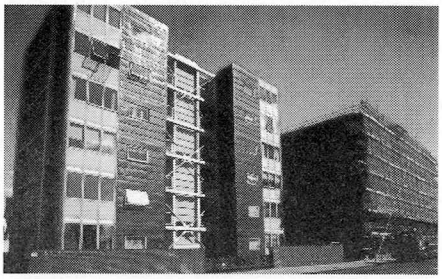


図版３：グラスゴー・グリーンと共同住宅（図版２の②と③）

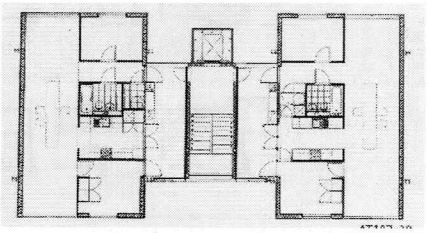
図版４：インナー・コートと連続住宅（図版２の④と⑤）



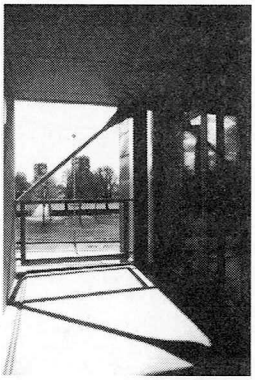
図版５：共同住宅（図版２の①）



図版６：共同住宅（図版２の⑩）



図版７：図版６の平面図



図版８：図版６と７の「アウトドア・ルーム」

図版９：連続住宅（図版２の⑤）

化をもたらすものであるといえる。設計者の一人イアン・リッチィ（⑩）は，こうした「アウトドア・ルーム」をアーバニティの表現の一つだとしている。

間取り（表1）も，多様性に富む。キッチン，バスルーム，ベッドルーム以外は基本的には間仕切りのないスペースにし，多様な生活スタイルに対応させている。それは，住まいの一部のスペースをスタジオやオフィスとして使用することも可能にするであろうし（実際，数戸はそのように使用されている），また，そうした用途を意識していくつかのフリー・スペースが設けられている住戸もある。その他，1階には，車椅子等使用可能なバリア・フリーを強く意識した住戸もいくつか用意されている。

このように様々なタイプの住宅，そして様々な暮らしに対応する試みがみられるが，それが「建築動物園[10]」という印象を与えてしまっていることは否めない。そうした批判が多数あるにもかかわらず，完成前から購入希望者があつまり，完成直後には完売した。こうした状況から，少なくとも都心に人を呼び戻すという目的においては，一定の成果をうみだしているといえるのであるが，実際の暮らしの中ではどのような効果があったのであろうか。それを知る手がかりとして，住人の声をきくことにした。

2－2－3　成　　果

「未来の家」が完成した1999年から5年経った2004年8月に，住人を対象にアンケート調査を行った。完成から5年後に調査を行ったのは，このプロジェクトの成果や暮らしの中での実態を知るには，数年の月日が必要であると思われたからである（暮らしの経験からの意見を参照する場合は，継続居住年数1年以下の回答者は対象としない）。

アンケートの目的は，「未来の家」プロジェクトのねらいと実態を照合することにある。それは，成果とともに今後の課題を示唆することになるであろう。ねらいとの関係では，「幅広い層に対応」可能であったか，また，「都市における新たなライフ・スタイル」との関係はどうか等をみることにし，住人の社会経済的データ，継続居住年数，ライフ・スタイルの変化等の合計17項目[11]の質問に対する回答と自由記述を住人に依頼した。当時完成した100戸の住まいのうち，調査票を配付[12]できたのが68戸で，うち31戸から回答を受けた。回収率は46％であるが，「未来の家」全戸からすれば31％ということになるので，アンケートの結果を「未来の家」の現状として一般化はせず，傾向をみる参考資料として扱うことにした。但し，アンケート調査にはみな大変協力的で，特に自由記述の部分も詳細にわたって書かれていたので，それらを実際の暮らしの中でのコメントとして取り上げていくことにする。

まず住人についてみていくことにしよう。一般的に，都市部に新たに建設された住宅には，「若い，子供のない，専門職につく」[13]人が住むといわれ，それは特に目新しい傾向ではないが，幅広い層や家族構成等にも対応するよう計画された「未来の家」ではどうであろうか。世帯主

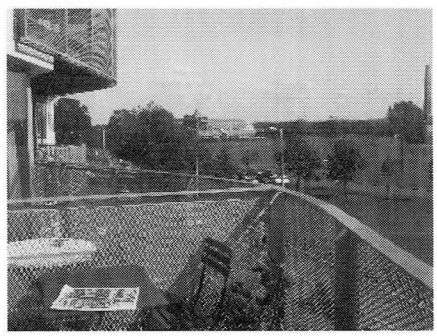
の職業についてみてみると，管理職，医者，教員，エンジニアなど[14]，90%以上が「社会経済的集団」[15]では，「A」にあたる層である。つまり，専門職につく住人が殆どである。平均年収は36,600ポンドでスコットランド全体の平均年収26,900ポンドをはるかに上回る。家主の平均年齢は39.5歳で，そのうち大半をしめるのが20代後半である。一人～二人暮らしが8割近くにのぼり，子供がいるのはわずか3世帯であった。価格，間取りも多様性に富み，様々な家族およびその将来的な変化にも対応できるというのが住宅デザインのコンセプトであったが，ここでも典型的な「若い，子供のない，専門職につく」住人が，回収されたデータの範囲内とはいえ，大半をしめているのである。では，それ以外の世代や層には対応できていないのか。子供のいる，あるいは出産予定の世帯のコメント等をみると，住宅には満足しているようであるが，「同世代の子供がおらず，子供の遊び相手がいない」というものや出産間近の人からは，「近辺に良い学校がないので出産後は引越を考えている」というものもあった。こうした点から，住人の層に偏りがあるのは，一つにまわりのアメニティの問題があるいえる。この点は，調査で浮上してきた学校以外の，周囲の他の環境の問題とあわせて，後で考察することにする。その他の層としては，退職者（58歳）が1件あり，この回答者は郊外住宅から移ってきている。詳細は後述するが，自由記述から非常に満足している様子がうかがえる。1日の大半を家やその周辺で過ごしているが，あきることはないという（継続居住年数6年)。こうしたことからも，数においては層に偏りがあるにしても，いくつかの層にわたって，住宅およびそれに関わる部分では，対応できている点が少なからずあるということができる。では，具体的にどういった点に満足しているのだろうか。

まず住人たちは，何に魅力を感じて「未来の家」を選んだのかみていくことにしたい。回答者の半数近くが，第1の理由として「立地」をあげている。そして，3割近くが「建築デザイン」をあげている。「立地」の利点としては，ほぼ同じ割合ではあるが「都心」，「職場」，「自然」の順で，そのアクセスに対する利便性をあげている。そうすると，住まいと都心，職場，自然等とが距離的に近ければ良いとことになるが，距離的な利便性以外の，これらの環境にアクセスするためのこの住宅ならではの利点はあるのであろうか。コメントの多くにグラスゴー・グリーンやその向こうに流れるクライド川の風景を住まいから享受でき，それを可能にするバルコニーや壁面いっぱいに広がる窓，共同もしくは専用のオープン・スペースがある点が気に入っているとある。このことから，周囲の魅力的な環境と豊かに関わりあえる装置をこの住宅が提供していることがわかるし，この装置は前述の「アウトドア・ルーム」とかさなる。さらに，これらの装置は，コミュニティー性を高めているという意見もいくつかみられた。具体的には，別々の建物の「最上階が空中通路によってつながれ住人同士の行き来を可能にし」，「ガーデン・テラスが屋外のリヴィング・ルームをつくり，さらに近隣との交流を高める」というコ

メントがある。調査を行った2004年夏も，特に週末となれば，多くの住人がベランダでくつろぎ，隣の，あるいは，地上を行き来する隣人と会話を楽しんでいる様子もよくみられた。図版11，12にあるように，２つの棟が空中通路でつながれ（住人のみ行き来可），そこから，最上階のメゾネット型住宅のへ出入りもでき，それぞれのテラスとしても使用されている。また図版13は，住人提供の写真であるが，隣り合うバルコニーに視覚的に隔たりをつくるものはない。戦後の集合住宅にみられるプライヴァシーを物理的に守ろうとした方向とは逆である。特に都市部の戦後のそれは，高密度であるが故に隣接する住居との区画は一層明瞭につけられていた。「未来の家」にみるような例は，都市住宅では得がたい開放性をつくるだけでなく，隣人とのコミュニケーションをつくりだしている。それはおそらく玄関口をとおしてのコミュニケーションとは異なるものであろう。また実際，人と人との直接的なコミュニケーションがないところがあるにしても，こうした各戸を超えた流動的な空間が，つながりを感じさせ，昨今さけばれている「住民同士によるコミュニティづくり」についても，自ずとそれにつながる連帯感を芽生えさせていくのではないだろうか。アンケート回答者のうち約６割が「未来の家」をコミュニティとみなしているので，それにつながる素地の一つは形成されているともいえる。

図版11：共同住宅（図版２の③）

図版12：共同住宅（図版２の②と③）


図版13：共同住宅（図版２の②）

一方，問題点もいくつか指摘されている。住人のコメントに「設備など，特に新しいシステムを導入しているわけではない」，「『トレンディ・イメージ』をつくりだすために，外観のインパクトに力を入れすぎている」という声もある。このプロジェクトは，技術面でも「革新性」を提示するのがねらいであり，実際，暖房システムにおいては，全ブロックに対応する効率のよいシステムをつくる計画

があったのであるが実現できず，また，地球環境を考える上でも，新たな工夫を提示するというねらいも，特に目新しいものではない既存の手法と導入しているということである。いずれも，時間にかなりの制限があったことによる結果だということだ[16]。その意味では実に表層的な「未来」である。

その他，数人がいまだこの地区にみられる売春や酔っ払い等の問題があることをあげている。こうした状況が前掲の子育てに適しない地域にしてしまう側面もあるのであろう。インナー・シティの社会問題は非常に根深く，表面的な都市整備だけで消えていくものではない。しかし，この地区の開発がその数を減らしているという声もある。周囲の様子に対して，殆どの住人は「よくなってきている」と答えており，あるコメントでは「この2，3年の間に近隣に魅力的なレストランやギャラリー等が移転し，市による舗石整備が進み，都心との連続性ができている。それによる人の往来とこの地に人が住み始めたということが，犯罪の減少につながっている（居住継続年数5年)」というものもある。実際，市の政策としても，この地の開発とともに，前述の「パブリック・レルム」計画が，市の中心から「イースト・エンド」の方向へも広がり，この「未来の家」にもつながりつつある[17]。それはさらに住民たちの欲するアメニティを充実させていくことになるであろうし，近隣に「過ごす」場をつくることになるであろう。その意味では，敷地内以外の多様な「アウトドア・ルーム」があることになるのである。これももう一つのアーバニティであろう。「未来の家」の住人は，「住み始めてからライフ・スタイルが変わった」という意見が半数以上あり，その中には「シティー・ライフを楽しむようになった」，「劇場，レストラン等の街のアメニティを積極的に利用するようになった」というコメントが圧倒的に多い。「よく運動するようになり，健康的になった」「活動的になった」というコメントもいくつかみられる。このように都市機能が生活の一部となっている。しかし，このアーバニティは，「未来の家」のような開発だけでは，具現化できないものである。「パブリック・レルム」等の他の計画と有機的につながっているからこそ可能になるアーバニティといえるであろう。

以上，アンケートからのデータやコメントを参照しながら，「未来の家」の暮らしをみてきた。そこにおける「未来」とは表層的な点もみられ，住人のライフ・サイクルとの関係でもいくつかの問題点がみられた。しかし，それは住宅開発単体のプロジェクトとしての限界でもあり，他の再生プロジェクトと連動することにより，克服できる要素をもちあわせていた。「未来の家」では，外界と横に広がる関係性が意識されていたが，さらにそれが都市のアメニティや環境と双方向的に結びつき，補い合うことにより，真のアーバニティがあらわれてくるものと思われるのである。

おわりに

イギリスのポスト工業都市の再生は，中央政府の梃入れが強かった1980年代から，90年代には地方自治体や民間による自力的再生へと変化をみせ，また，施設整備としては，工場や倉庫など工業都市固有の近代遺産の転用，再生に力点がおかれた80年代から，90年代後半には，上向きの景気も手伝って新建築ブームをうみだしていた。グラスゴーにおいても同様の傾向がみられるが，そうした変化の中で，文化イヴェントを誘致し，文化都市としての再生への理解と意識を市民の中に喚起させながら，プロジェクトを組み立てている点が，他のポスト工業都市に比べ秀でている点といえる。さらに，1990年代後半に入る頃から，文化を創出する都市へと変化をみせてきている。それは単なる新しさの創出ではなく，都市の遺産の延長上にある新しさの創出である。それを実践するイヴェントの一つが「英国建築デザイン都市」であった。

こうした「建築デザイン」に特化したイヴェントは，それにおいて優れた遺産を有するグラスゴーにとっては，都市のアイデンティティを確固たるものにさせる絶好の機会であった。そこでは，遺産を披露していきながら，新たな遺産を構築していく方向にも力点がおかれた。本稿でとりあげた「未来の家」プロジェクトは，単に住み手のための住宅建設ではなく，博覧会というかたちで，まずは，人々に都市生活のスタイルを提示した。その中では歴史的展示を含め，グラスゴーが様々な時代のニーズに応えながら新しい住環境づくりに常に取り組んできた様相を伝えている。「未来の家」をその延長上にある新たな「遺産」としても位置づけ，市民の理解，関心をえることに努めている。その成果は，建築デザイン文化が市の財産であるとの認識をもち，とりわけ，「建築デザイン都市」年のプロジェクトから一層そのように意識するようになったと答えた市民が，イヴェント参加者の50%近くをしめているという市の調査結果からも明らかである[18]。

一方，実際の住まいとしては，その「博覧会」としての意図から，「建築動物園」という評や真の「未来」を提示することができなかった側面もみられたが，ねらいとしたアーバニティは，住民の暮らしの中で創出されていた。しかし，それは都市機能と有機的にむすびつくことによって具現化できる要素をもち，有機的な都市政策が進められているグラスゴーであるから可能であったともいえるであろう。それはプロジェクト・チームにもあらわれている。開発地が根強い社会問題を抱えている地域だけに，民間だけであったら開発に慎重になるところであろうが，官民が協働で進めることにより，市場ともむすびつく開発が可能になったといえよう。そしてそれが，博覧会として提示されることにより，市民の理解を深めることにもつながっている。またそれは，今後の開発にむけては，市民と民間投資の自発的な動きを引き出すことになるであろうし，暮らしにおいては，現在の偏りのある住人層から多様な住人層をうみだすことにむすびつくかもしれない。

このようにグラスゴーでは，「スラムの都市」から「文化都市」へと蘇生し，その「文化都市」も文化的要素をもつ都市としてだけではなく，文化を創出する都市へと変化してきている。文化をマーケティングの対象としてみるのはいまや常識的であるが，グラスゴーの場合は，借り物の文化ではなく，歴史的な遺産とともに，都市の歴史的文脈のなかで，創出される新たな文化である。その中で営まれたプロジェクトは，順調にいくものがすべてではないにしても，個々のプロジェクトが複合的に展開することにより，それ自体が都市のダイナミズムとなっているといえる。

〈註〉

1 政府は，都市開発公社等を設置し，特定の地区を対象に都市計画，土地の取得，都市基盤施設等の整備，民間等の開発計画の許可事務などを一元的に実施していった。このしくみは，商業地区の再生には成功したが，一部の市民層の生活改善には全くつながるものではなかったという批判もある。

2 こうしたプロセスについては，Graeme Evans, *Cultural Planning: an Urban Renaissance?* London: Routledge, 2001を参照。

3 Glasgow's miles better と Glasgow smiles better の二重の意味をもたせている。

4 Glasgow City Council, *Glasgow's Economic and Social Development Beyond 1990 and 1999.*

5 "For it" は，この地方の言葉 "forit (= forward)" とかけている。

6 *The Glasgow Collection* (London: August Media Ltd., 1999)

7 *In Partnership: Working with Glasgow for 1999* (London: August Media Ltd., 1999)

8 Deyan Sudjic (1952～, London)，建築，デザイン評論家。1980年代後半から，建築デザイン関係の雑誌編集や展覧会のキュレーション等を手がける。

9 設計者の一人イアン・リッチィは「『アウトドア・ルーム』やリヴィング・スペースの再定義は，都市生活を提案する新しい方法となる」と述べている。
Ian Ritchie Architects, http://www.ianritchiearchitects.co.uk

10 Isi Metzstein, "Placed in Context?," *Architecut's Journal,* Jan. 1999, p. 37.

11 世帯主の年齢，性別，出身地，職業，年収，同居人数，継続居住年数，これまで住んだ地域と住宅のタイプ，現在の住まいを選んだ理由，購入か賃貸か，購入もしくは賃貸料，現在の家は一時的か生涯を通しての住まいか，入居以前の地域のイメージ，現在のイメージ，コミュニティとみなすか否か(理由)，問題点，ライフスタイルの変化についての17項目である。

12 調査票の配付については，各戸に設置されている郵便受に投函する方法をとった。住戸によっては外部から直接投函できないものもあり，その場合は手渡しにした。不在等で手渡しできないものもあり，結果として配付できたのが68戸であった。

13 Wren Rutherford, "Back to the future," *Prospect,* Aug. 1999, p. 39.

14 Business manager(4), Director(3), Lecturer(3), Architect(2), Engineer(2), I.T. Specialist(2),

Designer(2), Doctor(2), Accountant(1), Consultant(1), Surveyor(1), Labor union organizer(1), Music Producer(1)

15 人口を社会的・経済的指標で分けたもの。イギリスでは市場区分に利用される世帯主の職業による以下の6集団を指す。近年，新たな分類法が提唱されたが，グラスゴー市の調査では，この旧来からの指標が用いられているので，本稿でもそれを導入することにする。

A：企業・官公庁の上級管理職と高収入の専門職，B：企業・官公庁の中級管理職と中位の専門職，C1：監督職（職長・作業長等）・事務職・下位管理職，C2：熟練労働者，D:不熟練労働者，E：年金生活者・不定期就労者・失業者

16 Rutherford, p. 38.

17 Glasgow City Council, *City Plan: Part 1: Development Stratefy: City Centre Enhancing the Architectural Heritage and the Physical Enviroment,* http://www.glasgow.gov.uk

18 *1999 and beyond,* Glasgow 1999 Office, http://www.beyondglasgow1999.co.uk